

論文

over- の接辞添加に伴う現象のフレーム意味論的考察

— *overcome*, *overthrow* を一例に —

鬼頭 修

要 旨

本稿では、接頭辞の *over-* の添加に伴う、「他動詞化」と「選択制限の変化」という二つの現象に関してフレーム意味論の枠組みからの分析を提示する。前者の現象は、基体動詞では自動詞であったものが、*over-* の添加後、目的語をとるようになる現象のことであり、後者は基体動詞と添加後の *over-V* では、目的語にとることのできる名詞句の意味的特性に変化が起こる現象のことである。これらの現象に対して先行研究が動詞偏重のアプローチをとるのにたいして、本稿では動詞に限らず文中の他の要素（主語句、目的語句）の貢献や相互作用を重視した分析を行う。実際の分析対象としては、*overcome* と *overthrow* を扱う。分析の結果、以下の点が明らかになった。

- 語の意味は文・文脈の中で決定するものであり、そこに至るにあたっては重層的・多層的なフレームの取り合わせや相互選択のプロセスが関係している。
- 「他動詞化」のような統語的現象も、意味的・概念的説明が可能である。

キーワード： 認知言語学, フレーム, フレーム意味論, 意味の相互調節, 多義

0. はじめに

認知意味論の分野において、多義語研究は中心的トピックの一つである。(cf. Lakoff 1987, Sweetser 1990) その中でも、意味・機能において豊かな振る舞いを見せる *over* に関してはこれまで多くの研究がなされてきた。(cf. Lakoff 1987, Dewell 1994, Tyler & Evans 2001, Iwata 2004) 本稿では、接頭辞としての *over-* に焦点を当て、*over-* が添加することによって起こる意味的・統語的振る舞いの変化に関して論じたい。また、従来の *over-* 研究は、*over-* の多義ネットワークの記述が中心であったが、本稿ではそのような観点ではなく、「*over-* が基体動詞に与える統語的・意味的な影響」をフィルモアのフレーム意味論の観点から分析を行う¹。

1. *over-* の接辞添加に伴う振る舞いの変化

1.1 接頭辞 *over-* について

接頭辞 *over-* には大別して二種類の意味がある。一つは「空間的」意味であり、もう一つは「超過」の意味である。「空間的」意味とは、*over-* の「ある物が別の物の上を通り過ぎる」という空間的な意味を残している物のことであり、下の例の (1)~(3) がそれにあたる。『乗客が痴漢を上から取り押さえる』や『領土の上空を飛ぶ』ことを描写した (1), (2) のように物理的空間関係を表す物があれば、(3) のように『視線が失敗の上を通り過ぎる (=失敗を見過ごす)』(cf. Lakoff 1987) といったように抽象的なものも「空間的」な関係にあるといえる。それに対して、超過の意味は、基体動詞動詞に「~過ぎる」の意味を付け加える物である。(4) のように「寝過ごす」や、(5) のように「食べ過ぎる」といったものがある。語形成の観点から言えば、「超過」の意味の *over-* が添加された動詞のほうが意味的に透明であり、生産性も高い。

- (1) The molester was overpowered by the passengers.
- (2) B-29 would overfly the territory.
- (3) He overlooked the mistake.
- (4) He overslept.
- (5) He overate.

1.2 接頭辞 over- の添加に伴う現象

上で述べたように、接頭辞 *over-* はそれ自体、意味的に多義であるが、加えて、接辞が添加することにより、基体動詞とは意味的にもしくは統語的に異なった振る舞いをすることが観察されている。(cf. Yumoto 1997, Iwata 2004)

(6) は *overcome* の例であるが、そもそも基体動詞 *come* は、「来る」という意味では他動詞として用いない。よって (6b) のように、場所を目的語にとることはできないばかりか、(6c) のように *problem* のような抽象名詞もとることはできない。しかし、*over-* が添加することにより、他動詞として (6a) のように使用することができるのである。このように、基体動詞の統語的性質を変えてしまう場合があることがわかる。

次に (7) の例を見てみよう。(7a) と (7b) はともに野球の文脈における「暴投」のイベントを表している。興味深いのは、*overthrow* は、Theme の意味役割を持つ *ball* も、Goal にあたる *base* の両方を目的語にとることができるということである。それに対して、基体動詞 *throw* はあくまで Theme しか目的語にとることはできず、たとえ (7d) のように *base* を目的語にとったとしても、「ベースに向かって投げた」という意味にはならず、「ベースそのものを投げた」という意味にしかならないのである。つまり、*over-* の添加は基体動詞の選択制限までも変更してしまう場合があるということである。

- (6) a. He overcame the problem.
b. *He came the house.
c. *He came the problem.
- (7) a. He overthrew the ball.
b. He overthrew the base.
c. He threw the ball.
d. He threw the base.

このように、*over-* が添加することで基体動詞とは統語的・意味的に異なる振る舞いを見せることがわかる。次章では、これらの変化に関する先行研究を概観する。

2. over- の接辞添加に関する先行研究

本章では、二つの先行研究を概観する。ひとつは、Yumoto (1997) における語彙概念意味論的分析、もうひとつは、Iwata (2004) に見られる構文論的分析である。

2.1 Yumoto (1997), 影山・由本 (1997)

2.1.1 議論の概要

これらの論文ではレイ・ジャッケンドフによって提唱された語彙概念意味論 (cf. Jackendoff 1985, 1990) 上の概念である, 語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: LCS) を用いて分析が試みられている。由本らによれば, *over-* の添加は LCS によって次の (8) のようにとらえることができるという。

$$\begin{aligned}
 (8) \quad V: & \left[\dots \left[\text{GO} \left(\left[\text{ } \right], \left[\text{Path } \dots \left[\text{Place X} \left(\left[\text{ } \right] \right) \right] \right) \right] \right] \right] \text{ or} \\
 & \left[\dots \left[\text{INCH} \left(\left[\text{BE} \left(\left[\text{ } \right], \left[\text{Place X} \left(\left[\text{ } \right] \right) \right] \right) \right) \right] \right] \right] \\
 & \rightarrow \\
 & \text{over-V: } \left[\left[\text{GO} \left(\left[\text{ } \right], \left[\text{Path TO} \left[\text{Place OVER} \left(\left[\text{ } \right] \right) \right] \right) \right] \right] \right] \text{ or} \\
 & \left[\dots \left[\text{INCH} \left(\left[\text{BE} \left(\left[\text{ } \right], \left[\text{Place OVER} \left(\left[\text{ } \right] \right) \right] \right) \right) \right] \right] \right] \\
 & \hspace{15em} (\text{Yumoto 1997: 189})
 \end{aligned}$$

矢印を挟んで上が, 基体動詞の LCS であり, 下が *over-* 添加後の LCS である。Yumoto によれば, LCS における *over-* の役割は, 「OVER が Place 関数内に挿入される, もしくは置換されることである」と述べられている。(ibid.: 189) このことから, 由本らはいくまで, OVER を空間的なものと捉えていることがわかる。OVER が *heat* のような状態動詞に添加した場合, OVER の項は Property の項をとり, OVER の空間性は比喩的なものとして解釈される。しかし, *over-* の基体動詞には *sleep* のような移動動詞でも状態変化動詞でもない動詞があり, このような動詞については (9) に示す, 別個の LCS を割り当てている。(9) は, 「ある人 (i) が寝る」というイベントが, 時間の領域においてある時間を「越える」ことを示している。

$$(9) \quad \text{oversleep: } \left[\left[\text{Event} \left[\text{ } \right]_i \text{ SLEEP} \right] \right] \text{GO}_{\text{Temporal}} \left[\text{TO} \left[\text{OVER} \left[\text{ } \right]_j \right] \right] \quad (\text{ibid.: 98})$$

2.1.2 添加に伴う振る舞いの変化に対する説明

次に, 上記の枠組みによる現象の説明について概観する。まず, *overcome* に見られるような, 動詞の統語的性質を変えてしまう場合であるが, Yumoto (1997) では, *overrun* を例に説明を行っている。(10) の *run* の LCS には, Path 項は随意項であることを示す <j> が表記されているが, *over-* が添加することによって随意項ではなくなっていることがわかる。言い換えれば, *overrun* の目的語は, もともと *over-* の目的語であり, *over-* の添

加により文目的語として *over-* の目的語をとることが義務化され結果として *overrun* は他動詞となったということである。

- (10) *run*: [GO([Thing], [Path]<j>)]
overrun: [[GO([], [Path TO [Place OVER ([Thing]i)]])]] (Yumoto 1997: 188)

次に、選択制限の変化についてであるが、この問題に対して、由本は「定項²」という概念を導入することにより説明している。*overshoot* という動詞において、(11b) のように場所格を目的語にとるのは、GO 関数の第一項は、続く (12) に示したように、ARROW という定項で満たされている為に、それに値する語は統語的には実現せず、代わりに場所格にあたる項が実現すると説明している。

- (11) a. *He *overshoot* the gun.
 b. He *overshoot* the target.
 (12) *overshoot*: [CAUSE([Thing]i, [GO([ARROW], [Path To[Place OVER ([]j)])])]] (Yumoto 1997: 168)

2.1.3 問題点

まず、*overrun* の分析に関してであるが、*overrun* の目的語が、*over-* の項であるということは筆者も異論はない。しかし、「*over-* の添加により *over-* の項の統語的实现が義務化された」という説明は、過剰一般化である。(13) のように、*over-* が添加しても他動詞的な振る舞いはしない動詞や、(14) のように「文目的語 = *over-* の目的語、基体動詞の目的語」とは厳密には言えない場合³ に、上記の説明では矛盾してしまう。必要なのは、なぜこのような現象が起こるのか、その動機についての記述であると思われるが、由本はその点に関しては何も述べていない。

- (13) He *overworked* to death.
 (14) a. He *overslept* the meeting.
 b. He *overstayed* my welcome.

また、選択制限の変化についての現象に関しても、(12) のような定項を含んだ LCS の説明は、*overshoot* の場合には有効かもしれないが、冒頭で述べた *overthrow* のような場合には無効である。なぜならば、由本の挙げる LCS で、“He *overthrew* the ball.” という

文章を考えると (15) のようになり、GO 関数の第一項は BALL という定項で満たされているので、*ball* は統語的には実現しないことになるが、実際には *ball* を目的語に用いる例も見られる。この点で、(12) の LCS は、アドホックであると言わざるを得ない。

(15) [CAUSE([Thing]i, [GO([BALL], [Path To[Place OVER ([]j)])])]

2.2 Iwata (2004)

2.2.1 議論の概要

Iwata は、*over-* の添加にまつわる問題に関して、Goldberg (1995) で展開されている構文理論を用いた分析を提示している。彼によれば、 $\langle X \text{ over-} V Y \rangle$ という文には、3種類の構文が関係しているという。それは、ダメージクラス構文、状態変化構文、そしてランドマーク構文である。

ダメージクラス構文は、 $\langle NP V NP \rangle$ という形式に対して、“X negatively affects Y.” という意味を持つ構文である。*overload* が、そのような構文によって認可される動詞の一つである。例えば、(16) の文は、単純に、「積みすぎた」というのではなく、「積み過ぎによって）トラックに害をもたらした」という意味であるということである。

(16) He *overloaded* the truck.

状態変化構文は、同じく $\langle NP V NP \rangle$ という形式に対して、“X causes Y to change state.” という意味を持つ構文である。これによって認可される代表的な動詞には、*overheat* がある。そして、もう一つのランドマーク構文とは、他の二つの構文と幾つかの点で異なっている。ダメージクラス構文と状態変化構文には、「力の移動 (force-transmission)」が関係しており、そのような構文における参加者は、動作により何らかの影響を被るとされている。しかし、(17) に示すように、このランドマーク構文における参加者は、必ずしもそのような影響を被るとは限らない。そして、この構文は、他の二つの構文とは違い、特別な意味を持たない。ただ、目的語が、*over-* のイメージスキーマにおけるランドマークに対応しているというだけである。

(17) They *overfly* the territory.

Iwata によれば、これら三つの構文を用いて統語的振る舞いの諸変化に対して一貫した説

明ができると主張している。(Iwata 2004: 239)

2.2.2 添加に伴う振る舞いの変化に対する説明

基体動詞の統語的性質が変わる現象に関しては、Iwata は *overfly* の例を挙げて説明を行っている。Iwata によれば、これは動詞の Path を表す前置詞句が添加によって動詞に編入されているためだとしている。よって、(18) の例を見て明らかのように、(18a) では *fly* という動作の Path を *over the territory* が表しているが、*over-* が接頭辞として添加されることで、*overfly* という動詞自体に Path が編入され、本来であれば *over* の項である *territory* を文目的語としてとることができるようになったということである。この説明は、前述の Yumoto の *overrun* の説明と本質的には同じである。

(18) a. *overfly the territory*

b. *fly over the territory*

選択制限の変化については、Iwata は *overthrow* の例を挙げて説明している。前節で紹介した3つの構文の中で、*overthrow* はランドマーク構文によって認可される。言い換えれば、文の直接目的語は、イメージスキーマにおいて、ランドマークとなるものでなければならぬ。*overthrow* における *over-* のイメージスキーマは、TR である *the ball* が、LM である *the base* の上を通り過ぎていくという関係を表したものである。それゆえに、この場合の直接目的語は、ランドマークである *the base* になる。

(19) John *overthrew* [*a ball. / the base.]

2.2.3 問題点

構文理論によって、由本らの構成論的な限界を克服しようとする試みがこの論文の大きな特徴を成していると言える。しかし、前述の Yumoto 同様に *over-* の添加に伴う現象に関しての説明はアドホックなもので、包括的な議論であるとは言い難い。まず、統語的性質の変化に関しての説明であるが、基体動詞が本来自動詞であったものが *over-* が添加することによって他動詞化することの根拠として「*over* によって表される Path が動詞に編入されること」を挙げ、(18) のようなパラフレーズを行っているが、冒頭では述べたような *overcome* の場合 (6a)、(20) に示したようにパラフレーズをすることはできない。

(6) a. He overcame the problem. (再掲)

(20) *He came over the problem.

よって、Pathが動詞に編入されるという考え方は、同じ統語的振る舞いを見せる *overcome* には適用できないということになる。

次に選択制限の変化に関してであるが、Iwataによればランドマーク構文により、文目的語は *over-* のスキーマにおけるランドマークを満たすものに制限され、*base* のみがそれに値するということであった。しかし、繰り返すが、*ball* を目的語にとる例も多く観察されている。しかし、ランドマーク構文という理論装置そのものが、そのような本来とれるはずの目的語の可能性を殺してしまっているのである⁴。

2.3 両者に共通する問題点

ここまで *over-* の添加に伴う問題に関する二つの先行研究について概観してきた。本節では、二つの先行研究に共通する問題を、理論的側面および方法論的側面から指摘する。まず、理論的側面に関する問題を指摘する。それは、現象に対する「構成論的」な観点である。構成論的観点とは、「部分の全体が総和である」という考え方である。(cf. Langacker 1987: 449) 今回紹介した Yumoto の分析は、上記のような構成論的視点が色濃く反映しているといえる。*over-* の添加に伴う振る舞いの変化を、*over-* の項の「追加」であるとする分析 (ex. *overrun*) に顕著であった。すでに述べたように、*over-V* の目的語のあるものはもともと *over-* の項であったとする見方には筆者も賛同する。しかし、注意すべきなのは、このような構成論的な考え方を進めていくと、極論としては「*over-* が添加したからには、*over-* の項が統語的に実現しているに違いない」もしくは、「基体動詞がとることのできない名詞句が目的語として現れていればそれは *over-* の項であるに違いない」といった意味論的事実を無視した過剰な一般化を行ってしまうことになってしまう。しかし、既に述べたように、*over-* でも基体動詞の項であるとも思われない目的語をとる場合 ((14) a, b) に、上記のような構成論的な分析では不十分であるといえる。このような批判は、構成論的アプローチを越え、「構文」というゲシュタルトから現象を捉えようとする Iwata には当てはまらないように思うかもしれない。しかし、既に確認したように、*overfly* の分析における「編入」という概念自体は、非常に「構成論的」とであると筆者は考える。

さらに、両者の理論に共通する理論的特徴として、どちらも「動詞偏重」の理論であるということが挙げられる。LCS も構文も共に基体動詞の貢献を偏重しているという点では同じである。しかし、このような動詞偏重のアプローチも *over-* の分析においては限界が

ある。次に挙げる (21) の a と b は、ともに *overthrow* の例文であるが、基体動詞 *throw* を共通に持つにも関わらず、*over-* の意味は異なったものになっている。このような違いは、基体動詞の意味だけからでは論じることができない。このことから、*over-* の意味、ひいては *over-V* の意味をとらえるためには動詞だけでなく、他の名詞句にも注目する必要があることがわかる。

- (21) a. The revolutionist overthrew the government.
b. The pitcher overthrew the base.

さらに、方法論的側面に関しても問題点を述べたい。これも既に述べていることであるが、両研究の分析は、現象に対して、「これは *over-* の添加による項の追加があるから」であるとか、「これはランドマーク構文が関係しているから」といったように表面的な説明で終わってしまっている。しかし、これらの現象が成立する背景や動機付けに関してさらなる詳細な記述および説明が必要である。筆者は、形式上の構造が常に意味構造によって動機づけられているという認知言語学の文法観に立つ。3, 4 節以降で提示する本論では、これらの現象の背後にある概念的動機付を明らかにする。

3. フレーム意味論

ここでは、本論文で用いる主要な理論装置であるフレーム意味論について概観する。

3.1 フィルモアのフレーム意味論

ここでいうフレームとは、70年代にチャールズ・フィルモアによって提唱されたフレーム意味論 (frame semantics) における用語である。彼は、フレームを次のように定義している⁵。

- (22) ひとまとまりの言語的選択肢の集合で、最も単純な場合には単語の集合であるが、文法規則や言語的カテゴリーの選択肢の集合も含まれ、各種の場面のプロトタイプのな具現例と結びつけることのできるもの。(Fillmore 1975: 124, 池上嘉彦訳)
- (23) 関連する複数の要素が一つに統合された具体的な知識の型、あるいは、各要素が互いにまとまりをなすような、経験から抽出された式型。(Fillmore 1985: 223, 池上訳)

意味フレームの古典的な分析として、商取引に関する動詞 (*sell, buy, pay, charge*) フレーム

ムの分析がある。彼によれば、商取引のフレームは、「売り手 (seller)」、「買い手 (buyer)」、「お金 (money)」、「商品 (goods)」という四つの要素によって構成され、これらの要素がどのように統語的に実現するかにより、*sell*, *buy*, *pay*, *charge* といった四つの動詞の意味的な違いを説明できるということである。例えば、*sell* という動詞は、主語／直接目的語が、それぞれ「売り手」／「商品」といったカテゴリーに属する語によって満たされた時に用いられ、*pay* という動詞の場合は、「買い手」／「お金」によって満たされた場合であるということができる。ここで重要なのは、それら四つの要素によって構成される単一のフレームによって、四つの動詞の意味的な違いを捉えることができるということであり、同時に、それらの動詞は、そのような意味フレームが喚起されることによって理解されるということである。

フレームを喚起するのは動詞だけではない。名詞の理解にもフレームが大きく関わっているのは多くの事例から明らかである。Fillmore (1982) によれば、*land*, *ground* という二つの名詞は、共に同じ物を指す場合があるが、喚起するフレームが異なるという。*land* の場合は、「海 (*sea*) に対する陸 (*land*)」というフレームの中で理解され、*ground* の場合は、「空 (*air*) に対する地上 (*ground*)」というフレームの中で理解されるという (Fillmore 1982: 121)。よってこのように、語の意味はフレームによって構造化され、語は特定のフレームを喚起 (*evoke*) するということがわかる (*ibid.*: 117)。上記のようなフィルモア流のフレーム意味論は、近年、カリフォルニア大バークリー校を中心に行われているフレームによる辞書編纂プロジェクトであるフレームネット (FrameNet) (cf. Fontenelle, ed. 2003) の理論的基盤となっている。しかし、フレーム意味論並びにフレームネットにおいては、フレーム喚起によって語の曖昧性解消がどのように行われているのかは明示的に説明されていない。黒田・中本 (2005) は、このフィルモアのフレームネットをさらに発展させ独自の定義を行っており、フレームの喚起によってどのように語の曖昧性が解消されるのかを説明している。

3.2 黒田・中本 (2005) におけるフレーム意味論

黒田・中本 (2005) は、フレーム⁶ の特定に関して、次のような独自の議論を展開している。語は、品詞に関わらず様々なフレームを喚起するが、決して一つの語が一つのフレームを喚起するわけではなく、複数の異なったフレームを喚起するのが一般的である。そして、黒田らによれば、「どんな語も単独では意味フレームを特定する力はない」ということであり、そのような場合、「両立しないフレーム群が競合」しており、『この競合は「最適者の勝ち残り」方式で解消される』と考え、フレームの特定が並列的で、分散的であることを指摘している (*ibid.*: 12)。そして、このようなフレームの特定によって、語義の曖昧性

が解消されるとしている。黒田によれば、このような勝ち残りによる特定は、次のように定式化できるという⁷。

(24) $s = w_1 + w_2 + \dots + w_n$ ($W = \{w_1, w_2, \dots, w_n\}$) とするとき、 W のおのおのの要素によって喚起されるフレーム群の全体 F^* の競合によって決定される部分フレーム群 F とすると、

[1] F^* が、その真部分集合である F に収束することを、 W によって喚起されたフレーム F^* に対する**相互選択**と呼び

[2] 文 s の解釈 $M(s)$ が F が規定する意味 $M(F)$ に一致することが、文意のフレーム F への**引き込み効果**と呼ぶ。

これを簡単な例で考えてみる。(25)、(26)の例文に注意されたい。二つの文は、「Aが銀行を襲う」という文であり、Aの部分に何が入るかによって異なっている。

(25) 強盗が銀行を襲った。

(26) 暴走したトラックが銀行を襲った。

まず、(25)の文を見ると、まず、各語、「強盗」、「銀行」、「襲う」、「が、を」には、特定のフレームが結びついている。しかし、各語単独によって喚起されるフレームは非常に多くあり、その喚起における活性化の強度は、品詞によっても異なる。例えば、「強盗」という語が喚起するフレームは、文字通りの「強盗フレーム（ある行為主体が、別の参加者の物品を強奪する）」や、「逃走フレーム（強奪した物品を持って逃げ去る）」などいくつかが考えられる。つまり、「強盗」一語だけでは、これら複数のフレームが競合している状態なのである。これが、「襲う」という語と共起することによって（これを語同士の「取り合わせ」という）、喚起されるフレームは一気に収束し、最終的には、「銀行」との相互選択により、「強盗が銀行に押し入り、銀行員を襲い、金品を強奪する」という文意を得ることができる。このように、「強盗」という語がたどったような複数のフレームの収束のプロセスを、「相互選択」とよび、選択の結果として上のような文意が得られることをフレームへの「引き込み」という。これで、(26)のように主語が「暴走したトラック」に変わることによって、「相互選択」のプロセスも大きく変わってしまうことがわかる。さらに、「銀行」という語の点から考えると、(25)の場合は、「引き込み」によって「銀行」が「銀行員」として解釈されるのに対して、(26)の場合は、「建物」として解釈されるということがわかる。このことから、(29)で示されているフレーム間の「相互選

択」や、フレームへの「引き込み」は、いわゆる文脈効果、もしくは、ラネカーの提唱する意味調節 (semantic accommodation) (Langacker 1987: 76) の具体的なプロセスの内実を示すものであるということがわかる⁸。

3.3 本アプローチにおける取り組み

本アプローチ、接頭辞 *over-* の分析に関しても、上で示したような意味フレームの知見を取り入れて分析を行う。まずは、本アプローチにおけるフレーム相互選択の理想モデルを示す。次ページの図1を参照していただきたい。丈夫の上部の、X, V, *over-*, Y (Vは動詞, X, Yは任意の名詞句を指す) と書かれたボックスが実際の言語表現 (Langackerの用語でいうならば音韻極) になる。そして、その下に、長方形の中にある丸四角が、各語と結びついているフレームである。複数のフレームが書かれているが、これは語が一語の段階で複数のフレームが競合している様子を表している。これら、各語のフレームが、X, V, *over-*, Y という語同士の取り合わせにより、文意を得るためのフレームが決定される。太線で囲まれているフレームが最終的に勝ち残ったフレームである。勝ち残りに際して、相互選択のプロセスが、点線で表されている。この場合は、Xのフレーム (ここでは仮にhとする) と基体動詞のフレーム (h) が一致し、またXの別のフレーム (d) がYのフレームと一致している。そして、それらのフレームと *over-* のフレームが部分的に一致している。ここに書いたのは、あくまでモデル図であって、実際の相互選択のプロセスは、もっと複雑であり、もっと多くのフレームが関わっていると考えられる。この図により強調したいのは、各語は、関係する全てのフレームに直接関係しているわけではなく、それぞれが部分的に家族的類似関係にあることによって結果的に相互関係にあるということである。言い換えれば、本モデルは、いわゆる語と語の意味的相互作用の内実をスキーマティックに表現したものであるといえよう。

次節では、このフレームモデルを用いた *over-V* の分析を提示する。

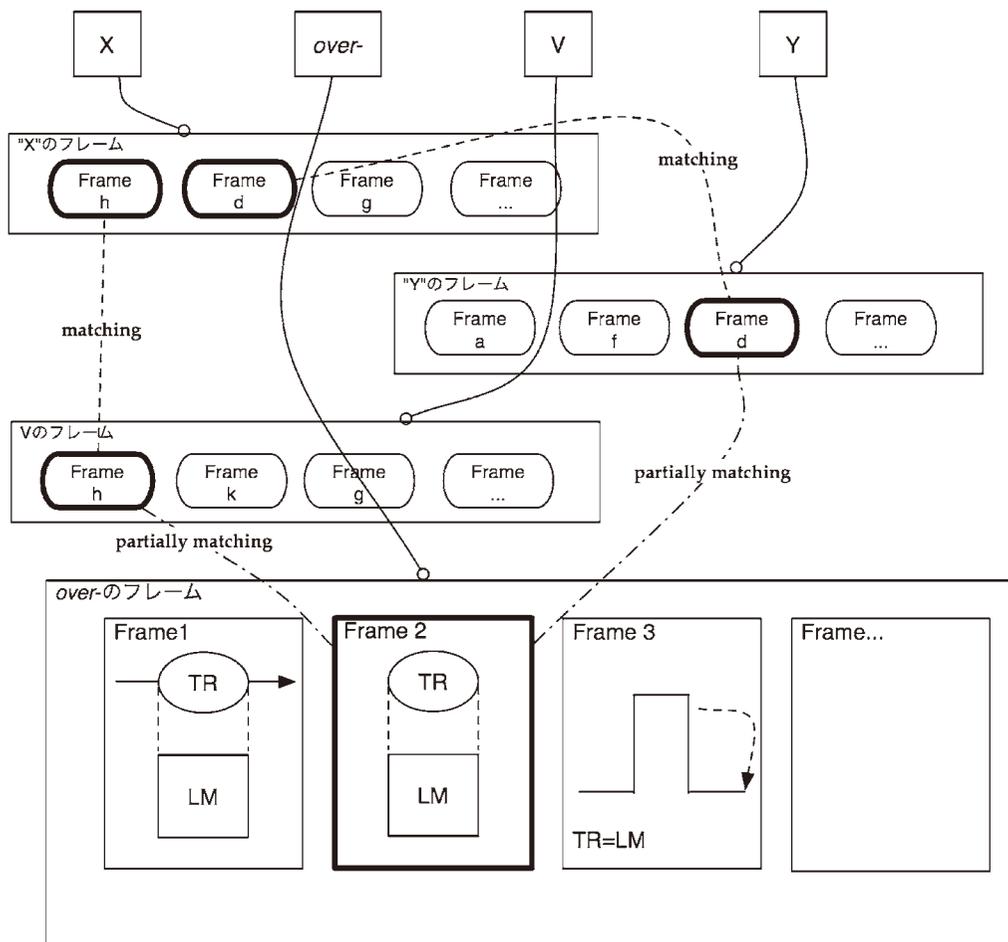


図1. “X over-V Y” におけるフレーム相互選択モデル

4. over- の添加に伴う振る舞いの変化に関する分析

4.1 overcome の分析

まず、もともと自動詞であった基体動詞が *over-* の添加によって他動詞となる現象の分析を提示したい。ここでは、*overcome* を例として示す。

- (6) a. He overcame the problem.
- b. *He came the house.
- c. *He came the problem. (再掲)

このような他動詞化現象の分析対象として先行研究では *overrun* や *overfly* が扱われていたにも関わらず、本稿で、あえて *overcome* を選んだのは、前節で述べたように、*overcome* は “X V over Y” というパラフレーズが不可能であり、それゆえに先行研究のいずれの枠組みでも説明不可能な例であったからである。

次の図2に、“*He overcame the problem.*” におけるフレーム関係を示した。

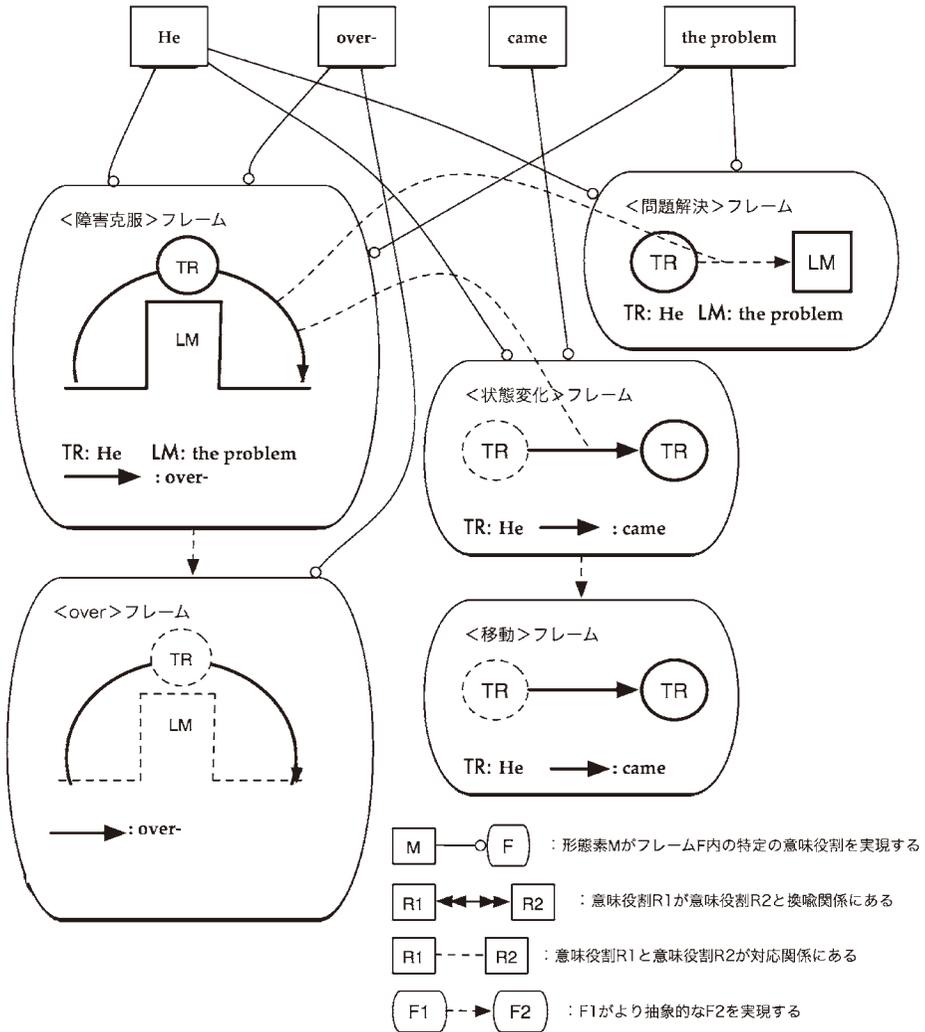


図2. “*He overcome the problem.*” に見られるフレーム関係

図中の矢印や線がどんな関係を指すのかについては、図中右下の対応表を参考にしていた

だきたい。図の表記に関して筆者独自の表記法を用いたため、まずそれら表記法を列挙する。

- 特定の形態素が特定の意味役割を実現している場合、その要素は太線で表される。例えば図2を見ると、[He, over, problem] は、「障害克服フレーム」を喚起しているがその中で、[He] は、「障害克服フレーム」内における克服者 (TR) を、[over] は、克服者 (TR) が障害 (LM) を越えていく矢印を実現している⁹。尚、図2のような表記では、形態素のボックスが単にフレームにつながられているだけだが、これはその形態素が実現する意味役割が任意であるということではない。本当は、個々の形態素を個々の意味役割と個別に結ぶことが望ましいが、線が交錯し見にくい図になってしまうことを避けるためにこのような表記法をとった。この点で、混乱を避けるために各フレームの枠の下部に、それぞれの役割が文中のどんな要素によって満たされているかを示した。
- 同時に、太線で表されている部分は統語的に実現されていることを指し、波線はそうではないことを指す。さらに重要なこととして、波線部分で表される意味役割・関係は、統語的には実現されていなくても概念的には顕現している (conceptually present) ことを暗示する。これは、Langacker のベース・プロファイル関係とほぼ等しいものと考えてよい。(Langacker 1987: 183)
- 各フレーム内の意味役割の関係を表すに際して、Langacker のビリヤードモデル (Langacker 1991: 217) におけるエナジーフローの図を援用したのは、over- のようなよりスキーマティックなフレーム¹⁰ との関係を示す際に有用であると考えたからである

さて、図2からどんなことがわかるのだろうか？ まず、この文の解釈に関係しているのは、少なくとも [He, over, problem] の取り合わせによって喚起される「障害克服フレーム」、[He, problem] の取り合わせにより喚起される「問題解決フレーム」、そして [He, came] により喚起される「状態変化フレーム」であると考えられる。これら3つのフレームが相互に一致することによって文全体の解釈が可能になっている。まず、over- には (27) に示すように「何らかの障害物を越える」というフレーム (スキーマ) が関係している。このフレームは、「何らかの問題を解決する」という「問題解決フレーム」と大部分において一致すると考えられる。

(27) He went *over* the hill.

次に「状態変化フレーム」との関係について見てみよう。基体動詞である *come* は通例 (28) のような移動動詞としての意味がプロトタイプであろう。OEDを見ると、確かに *overcome* が使われ始めた8世紀から11世紀頃は、“To come upon, get at, reach” という意味で使われていたことがわかる。しかし、*come* は (29) に示したように、「主語がある状態から別の状態に変化する」というフレームも喚起する¹¹。

(28) He came here.

(29) His dream came true.

“*He overcame the problem.*” においても、直接的に関係しているのは「状態変化フレーム」であると思われる。つまり、主語の *he* は、「障害克服・問題解決」前と後では、状態が変化していると言える。そのような意味で、基体動詞 *come* が指す状態変化の過程は、障害克服や問題解決の過程と一致するのである。そして、このフレーム間の一致があるからこそこの文の理解が可能になっていると言える。図2では、このような部分的な対応関係¹² が点線で表されている。たしかに、図2を見れば文目的語の *the problem* は、「問題克服フレーム」におけるLMを満たすことから、*the problem* は *over-* の項であるということと言える。しかし、このことは文全体のフレーム間の複雑な相互作用の一部に過ぎないことがわかるであろう。

よって、*overcome* は、相互選択の結果勝ち残った、3つのフレーム間の一致により *the problem* という目的語をとるということがわかる。

4.2 overthrow の分析

続いて、動詞の選択制限の変化についての現象に対する分析を提示する。*overthrow* を例に考える。

- (7) a. He overthrew the ball.
 b. He overthrew the base.
 c. He threw the ball.
 d. He threw the base. (再掲)

“*He overthrow the base.*” という文におけるフレーム関係図を次のページに示す。

over- の接辞添加に伴う現象のフレーム意味論的考察

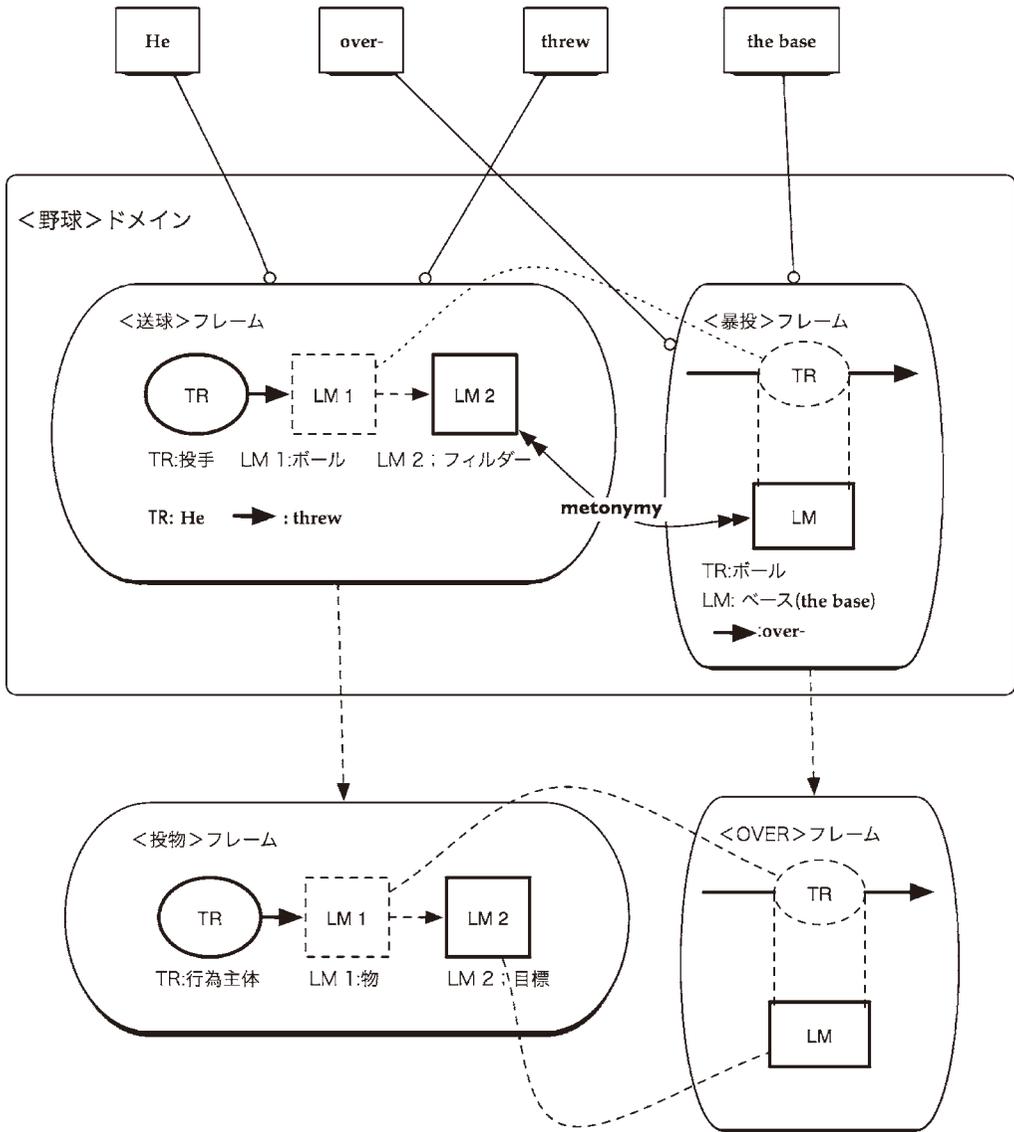


図3. “He overthrew the base”に見られるフレーム関係

まず、この文を解釈する上で、もっとも重要なのが、「野球ドメイン」であろう¹³。このドメインの喚起に関係するのは、*threw*という動詞だけではない、基体動詞 *threw* と *base* といった名詞句との取り合わせに加えて、その前の文脈も関係している¹⁴ と言えるであろう。もし、これが夫婦喧嘩の文脈であれば関係するフレーム・ドメインは異なる物となっ

たであろう。そして、このような「野球ドメイン」の中で、動詞 *threw* は「送球フレーム」を喚起し、*over-* のスキーマはボールがベースの上を通り越すといた「暴投フレーム」と一致する。ここで重要なのは、「送球フレーム」においては、直接的には *the base* は関係していないということである。図から明らかなように、*the base* 自体は、「暴投フレーム」内のベース (LM) を実現する。このベースとはすなわち、「送球フレーム」内のフィルダー (LM2) のことであり、この二つはメトニミーの関係にある。結果的に、「暴投が起こる」ということは「投手 (もしくはフィルダー) の投げた球がベースを守るフィルダーの上を通り過ぎた」ということとして理解され、文意が得られると考えられる。それでは、直接目的語が *the ball* になった場合はどのようなフレーム関係を得ることができるのであろうか？ 次の図4を見ていただきたい。

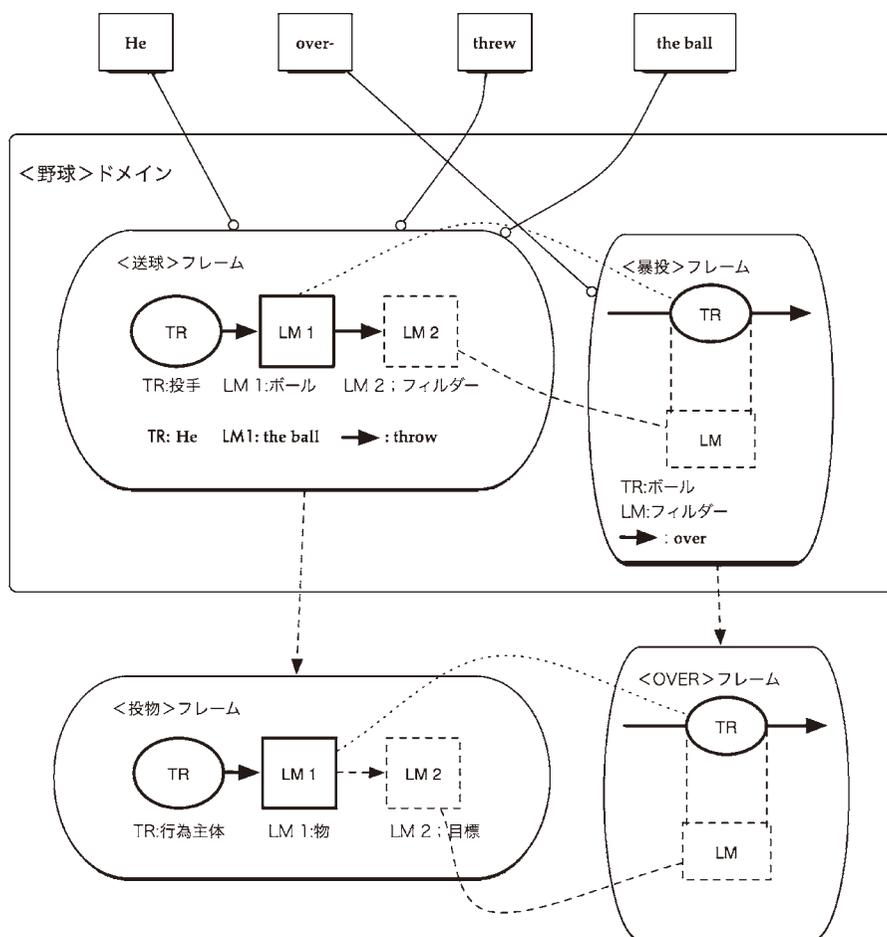


図4. "He overthrew the ball" に見られるフレーム関係

まず、「送球フレーム」内において実現されているのが LM2 ではなく、Theme の LM1 であることから図 4 は図 3 の図と地を反転させたものとも考えるかもしれないが、この図はそれ以上のことを示唆している。図 2 では、「送球フレーム」の喚起に関するのは主語 (*he*) と基体動詞だけであったのに対し、今回は、直接目的語である *ball* も関係していることがわかる。これは筆者の直観の域を出ないが、単純に 1) [*he, threw, base*] と 2) [*he, threw, ball*] という語群を見た際に、共に「野球」を連想するのは確かだが、「送球」を連想する確率が高いのは明らかに後者ではないだろうか¹⁵。そのように考えたとき、「送球フレーム」の喚起に、*ball* が関係していると考えるのは妥当であると思われる。

以上の分析から、*overthrow* が *base* のような目的語をとることができるのは、「暴投フレーム」の喚起が鍵を握っているということがわかった。さらに、目的語が *base* であるのか、*ball* であるのかの違いは、フレームの喚起のプロセスの違いとして据えることができると思われる。いいかえれば、このことは文理解のプロセスの違いでもあると考えられる。この点は、心理実験による実証が必要であろう。

4.3 まとめ

以上、*overcome* と *overthrow* を一例に *over-* の添加に伴う現象をフレーム意味論の観点からの分析を提示した。これらの分析からどんなことが明らかになったのだろうか。まず一つは、「語の意味は文・文脈の中で決定するものであり、そこに至るにあたっては重層的・多層的なフレームの相互選択のプロセスが関係している」ということである。つまり、文の中における他の語との取り合わせや相互作用を考慮に入れないで「語の意味論」を議論することは限界があるということである。

さらに、本稿における分析は、形式上の構造が常に意味構造によって動機づけられているという認知言語学の文法観を補強する役割を果たすものだと考える。実際、*overcome* の分析では、他動詞化という統語現象をフレームという概念的側面からの分析を行うことで、現象の背後に潜む概念的・意味的動機付けを明らかにした。このことは、統語的現象に対する概念的・意味的アプローチの可能性を提示するものとも考える。

5. 今後の展望

本稿で、今回の分析では、フレーム意味論をもとに *over-* の添加に伴う現象の背後にある概念的関係を示した。しかし、関係するフレームに関してはあくまで筆者の直観を越えるものではない。この点で、理論を実証・補強する心理実験が必要であることは言うまでもない。今後、特定の“X *over-V* Y”という文において具体的に関係するフレームの特定

を行っていききたい。現在, *overthrow* に分析対象を絞り実験の具体的なストラテジーを模索中である。

また, 今回は他動詞化の問題と選択制限の変化に関して論じたが, 添加に伴う別の現象に関しても分析を行っていききたい。

注

- 1 本稿は, 鬼頭 (2006) に加筆・修正を行ったものであるが, 鬼頭 (2006) ではover-の意味に関しての分析も行われている。over-の多義に関してはそちらを参照されたい。
- 2 この「定項」とは, Jackendoff (1985) におけるlexicalization, もしくはJackendoff (1990) におけるincorporationと, 同等のものであると考えられる。例えば, *butter*という動詞であれば, LCSのレベルで, GO関数のThing項が既にBUTTERという定項によって満たされている為に, 直接目的語がONの項になり, それゆえに, (1) に示す通り, “*He buttered the bread.*” という表現が可能になると説明している。
(1) *butter*: [Event CAUSE ([Thing X], [Event GO ([Event GO [Thing BUTTER], [Path TO ([Place ON ([Thing y]))]])])])]
(Jackendoff 1985: 184)
- 3 “*He slept over the meeting.*” とは直接パラフレーズできない。また “*He slept over the time when the meeting had begun.*” と言い換えられるように思われるが, 必ずしもそうとは限らない。「会議の時間に間に合わない」ことは必ずしも, 「会議の時間に起床する」ことを指すとは限らない。9時に行われる会議に出席するために, 7時には起床しなければならず, うっかりして8時に起きてしまい会議に出られなかった場合にも “*He overslept the meeting.*” という表現を使うことができるのである。よって, *the meeting* がover-の項であるとは厳密には考えがたい。
- 4 つまり, Iwataの理論に沿えば, 「ボールはover-のスキーマではトラジェクターにあたるので文目的語になることはできない。」という予測がたつが, これは実際の言語現象とは相容れないものである。
- 5 次に挙げる, 池上による訳は, ウングラー&シュミッドによる「認知言語学入門」(池上訳)に掲載されている翻訳を参考にした。
- 6 ここで述べられているフレームという概念は, 3.1節で紹介したフィルモア流のフレームの定義とは, 若干異なっている。ここで使われているフレームという概念は, 黒田によれば, 「状況レベル」のフレームのことである。「状況」とは, 「第一義的にある時空に繰り返し現れる存在の意味特徴のあいだの共変動を捉える一般化であり, 第二義的に, その一般化に基づく概念化のパターン」(黒田・中本・野澤 2005: 144) であると定義している。そして, 意味フレームに関して, 次のような定義を行っている。
(2) i. 意味フレームはヒトの(状況)理解の単位である; すなわち, ヒトが区別可能な状況の一つ一つをコードしている非言語的な単位の一つである。
ii. 意味フレームは, 状況の理想化であり, その内容は(典型的には) <<何が>, <いつ>, <どこで>, <何のために>, …, <何を>, <どうする>>という形式で記述できる。
iii. 意味フレームは有限個しか存在しない。意味フレームの集合が, ヒトが理解できる状況の全体を定義する。
(黒田・中本 2005: 3)

over- の接辞添加に伴う現象のフレーム意味論的考察

- 7 (24) に示した定式化は、黒田本人とのメールによるパーソナルコミュニケーションによる。尚、(24) 中の強調は筆者による。
- 8 さらに言えば、ここで示した「銀行」のような多義的振る舞いは、Croft & Cruse (2004) において指摘されている、facet (Croft & Cruse 2004: 116) であると考えられるが、相互選択のプロセスは、そのようなfacetが、どのような環境で実現するに至るのかということについて説明しているといえる。
- 9 当然、overが実現するのは、「関係」であって「意味役割」ではない。黒田は、この点で、動詞はフレーム内の意味役割ではなく、フレームそのものを実現するものとしてフレームそのものと結びつけるという表記法をとっているが、筆者はあえて動詞が「フレーム内の意味役割を満たす要素同士の関係を実現する」といったスタンスをとる。
- 10 over- のスキーマのような抽象的な知識をフレームとして扱うかどうか議論の余地のあるところである。黒田も、フレームに抽象度の違いがあることは認めている。本稿では、over- のスキーマも一つのフレームとして扱うことにする。
- 11 言うまでもなく、「移動」という物理的・空間的意味が比喩的拡張をした結果「状態変化」の意味を獲得したと思われる。
- 12 ここで言う「対応関係」とは、ラネカーのいう「対応関係 (correspondences)」(Langacker 1987: 90) のことである。
- 13 ここで言うドメインとは複数のフレームを内包する概念体であると思われる。
- 14 ドメインの喚起において文脈は不可欠であるが、本枠組みにおいてそれを表記することはしていない。どのようにフレームの記述に導入するのかは今後の課題とする。
- 15 もちろんこのことは、2) が、主述の関係になっている (*He threw a ball.*) のに対して、1) は、「野球」というコンテキストが主述の読みをブロックする (野球の文脈で *He threw a base.* というイベントはありえない。) ことも大きな要因である。ただ、このことを実証するためには心理実験をして検証する必要がある、今後の課題である。

参考文献

<著書, 論文>

- Barlow, Michael and Susan Kemmer. (ed.) (2000). *Usage-based models of language*. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Brugman, Claudia. (1981/1988). *The story of over: polysemy, semantics, and the structure of the lexicon*. New York: Garland.
- Cruse, Alan D. (1986). *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Croft, William. and D. Alan. Cruse. (2004). *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Dewell, Robert. B. (1994). *Over again: Image-schema transformations in semantic analysis*. *Cognitive Linguistics* 5 (4), pp.351–381.
- Fillmore, Charles. (1975). "An alternative to checklist theories of meaning." *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- . (1982). "Frame Semantics." In: The Linguistics Society of Korea. (ed.) *Linguistics In The Morning*

- Calm Selected Papers from SICOL-1981*, pp.111–137. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- _____. (1985). “Frames and the semantics of understanding.” *Quanderni Semantica*, 6, 2., pp.222–254.
- Fillmore, Charles. and B.T. Atkins. (1992). “Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors.” In: Adrienne Lehrer and Eva Kittay. (ed.) *Frames, fields, and contrasts*. Hillsdale/N.J.: Lawrence Erlbaum Assoc., pp.75–102.
- Fontenelle, Thierry. (ed.) (2003). *International Journal of Lexicography—Special Issue, FrameNet and Frame Semantics*. Vol.16 (5). Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (1995). *Constructions: a constructional approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Iwata, Seizi. (2004). *Over-prefixiation: a lexical constructional approach*. *English Language and Linguistics* 8.2, pp.239–292.
- Jackendoff, Ray. (1985). *Semantics and cognition*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- _____. (1990). *Semantic structures*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Kuroda, Kow. (1999). “Outlining the Pattern Matching Analysis: A theoretical framework proposed for a realistic description of natural language syntax.” *Papers in Linguistic Science*, vol.5, pp.1–31. Department of Linguistics Science, Kyoto University.
- _____. (2000). *Foundations of Pattern Matching Analysis: A New Method Proposed for the Cognitively Realistic Description of Natural Language Syntax*, Ph.D. diss. Kyoto University.
- _____. (2001). “Presenting the “Pattern Matching Analysis,” A framework proposed for the realistic description of natural language syntax”. *Journal of English Linguistic Society* 17, pp.71–80.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: what categories reveal about mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald.W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. (1991). *Concept, image, and symbol: the cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- _____. (1993). “Reference-point Constructions.” *Cognitive Linguistics*. No.4, No1, pp.1–38.
- Langendoen, D.T. (1970). *Essentials of English Grammar*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Quirk, Randolph., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman.
- Rice, Sally. A. (1987) *Toward a Cognitive Model of Transitivity*. Ph.D. diss. University of California, San Diego.
- Sugioka, Yoko. (1985). *Interaction of derivational morphology and syntax in Japanese and English*. New York: Garland.
- Sweetser, Eve E. (1990). *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Tyler, Andrea. and Vyvyan Evans. (2001). “Reconsidering prepositional polysemy networks: the case of over.” *Language* 77, pp.724–65.
- Ungerer, F. and H.J. Schmid. (1996). *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Essex: Longman. [池上嘉彦他訳. (1998) 『認知言語学入門』. 大修館書店]

over- の接辞添加に伴う現象のフレーム意味論的考察

- Yamada, Shoichi. (2000). "A semantic study of the prefix *over-* and the norm of evaluation." *Tsukuba English Studies* 19, pp.65-80.
- Yumoto, Yoko. (1997). *Verbal prefixation on the level of semantic structure*. In Kageyama, T. (ed.), *Verb semantics and syntactic structure.*, pp.177-204. Tokyo: くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 (1997). 「語形成と概念構造」, 中右実編『日英語比較選書 8』. 東京: 研究社.
- 鬼頭修 (2006) 『接頭辞 *over-* の多義に関する認知的アプローチ』京都大学大学院人間環境学研究所修士論文
- 黒田航 (2005). 『日本語の Pattern Matching Analysis (PMA) の簡単な実例—“xがyを襲う”の分析を一例にして並列分散意味論 (PDS) の基礎を解説する—』. 未刊行論文 (以下のウェブサイトで入手可能: clsl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)
- 黒田航・中本敬子 (2005). 『階層の意味フレームは分析はネットワーク分析を越える 意味フレームに基づく言語分析/概念分析の理論と実践』. 未刊行論文 (以下のウェブサイトで入手可能: clsl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)
- 黒田航・中本敬子・野澤元 (2005). 「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」, 山梨正明編, 『認知言語学論考 No.4 2004』, pp.133-269. 東京: ひつじ書房.
- 中本敬子・黒田航・野澤元・龍岡昌弘・金丸敏幸 (2005). 『FOCAL/PDS 入門 フレーム指向語彙概念分析/並列分散意味論の具体的な紹介』. 未刊行論文 (以下のウェブサイトで入手可能: clsl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)
- 山田祥一 (2001). 「接頭辞 *over-* の空間的用法と程度的意味に関する一考察」, 中右実教授還暦記念論文集編集委員会編, 『意味と形のインターフェイス』(上), pp.231-239. 東京: くろしお出版.
- 山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

<辞書類>

- Cowie, A.P. et al. (ed.) (1948). *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 4th edition. Oxford: Oxford University Press.
- 寺澤芳雄 (編) (2002). 『英語学要語辞典』. 東京: 研究社